本の森

訪問

「民族衣装を着なかったアイヌ」を書いた　瀧口夕美（たきぐちゆみ）さん

人生切り開いた祖先、女性

鎌倉市郊外で、夫の作家黒川創さんと一緒に、生後2カ月の長女の育児真っ最中。「準備に10年以上かかっていたので、出産前には本にしなくては、と必死でした」

アイヌ民族の血を引く著者が、腹を据えて生きていくために行った取材と思考の記録。観光地・阿寒湖畔の土産物店に生まれ、店では、自覚がないままアイヌらしく振る舞わざるを得ず、「アイヌと自分との距離が測れなくなった」との悩みを深めた。

母親や親戚への聞き取りに始まり、郷土資料を調べ、高祖父が十勝管内浦幌町で運営した渡船場跡地も訪れた。祖先がアイヌらしさをいかに残したか、和人との関係などを一つ一つひもといた。

「歴史的には、アイヌ民族は土地を奪われて虐げられましたが、高祖父は、和人の人たちとも助け合って暮らしていた。民族の歴史から、かなりはみ出していました」

思わぬ出会いもあった。観光地育ちのアイヌの若者が陥りがちな状況について書かれた書籍「階級を選びなおす」と、その著者の井上美奈子さん（筆名・茅辺かのう、2007年死去）に出会えたのだ。京大文学部哲学科を中退後、阿寒でも暮らした「考える人」、井上さんの指摘はこうだ。

＜売るほうのあいぬの人たちは最初から負を背負っています。それは自分にとっての手段であるべきところへ自分そのものを置いているからです。そのために商品の売行がよく金銭上の満足感を得たとしても主体は預けたままであり依然として手段たることに甘んじることを習慣化させてしまう（中略）生活の主体であるべき自分は欠落したままであり（中略）気付くこともできなくなる＞

「二重の虚構の上に成り立っているような生活、との指摘は、まさに私が抱えている問題でした。びっくりしました」

取材先は、さらにロシア・サハリンへ。日本統治下で教育を受けた少数民族ウイルタと朝鮮人の老女を訪ねる。しかし、時代に翻弄された女性たちは、たくましかった。

「女性から女性の私へのアドバイスは、あけすけな話も含めて本当に面白かった。思いやりを持って語ってくださった」

今とは比較にならないほど厳しい時代に、自ら人生を切り開く生き方の、何とすがすがしいことか。すでに多くの女性が世を去ったが、本書に彼女たちの言葉は残った。

編集委員　土屋孝浩

瀧口夕美
民族衣装を着なかったアイヌ
北の女たちから伝えられたこと

編集グループSURE
2625円

◇

道内では本書は直接販売。本代金に送料210円を加え、郵便払込用紙で「00910・1・93863　編集グループSURE」へ。

単行本

◆暮れていく愛　鹿島田真希著

妻の献身に気遣いをする優しい夫。その夫の浮気を疑う妻。絶望的な孤独に直面した2人が考えるのは、それぞれに抱えた異様な記憶のことだった…。深く愛し合いながらも心の底から理解することができない夫婦を、緊迫感あふれる筆致で描き出した表題作のほか、女子大生の不毛な冒険を独白で浮き上がらせた1編を収録。（文芸春秋　1575円）

◆□（しかく）　阿部和重著

□阿部和重

角貝ササミが死んでしまった。生き返らせるには1年以内に四つの身体部位を集めなければならない。こうして2人の男の奇妙な殺りくのミッションが始まった。監禁、虐殺、カニバリズム、テロリズム。血と暴力とアンチモラルに満ちた、先の見えないアドリブ感あふれる小説。残酷な描写は読者を選ぶものの、実験的な作風に著者の野心が感じられる。（リトルモア　1470円）

◆崩壊　塩田武士著

大阪近郊の街で市議会議長が殺された。暴力団と関わりのある息子、パチンコ出店条例をめぐる市長との確執、若い愛人。被害者の周辺を洗ううち、しかし意外な線から1人の男が浮かび上がってくる。男は刑事自身の過去とも絡み、事件は思いがけない結末へ。人々の欲望と悲しみを映すミステリー。（光文社　1680円）

◆バージンパンケーキ国分寺　雪舟えま著

曇りの日にだけ営業するちょっと不思議な喫茶店、バージンパンケーキ国分寺。客に合わせて色とりどりのケーキを作る女店主のもとに、魔法が使える占い師、人と違う感性の女子高生など、個性的な面々が集う。親友と幼なじみの恋に悩む女

©Terry　Heffernan

尊厳の芸術

ほんとのこと言えば？　佐野洋子対談集

評　樋口伸子　詩人

生きることにも死ぬことにもたじろがず、手加減なしに人を愛そうとした佐野洋子が9人の対談者とともに残した言葉。自分語りにありがちな鼻白む自己演出などなく、この人の愛読者にはこたえられない、対談の妙味満載の一冊である。

その内容は対談相手と主題を目次に拾う方が早い。幕開きの小沢昭一「猫対談」に続く河合隼雄「男の目　女の目」では、相手のとぼけた包容力に委ねた安心がいい味をかもす。明石家さんま「我が子は天才！」、谷川俊太郎「子供時代・絵本・恋愛」、大竹しのぶ「100万回生きたねこ」、岸田今日子「母親対談『お母さん』って恥ずかしい!?」、阿川佐和子「気がつけば石井桃子だった」では表現者の仕事つながりから世間や親子の広がり、本音の二重奏が痛

佐野洋子
ほんとのこと言えば
佐野洋子対談集

人々への関心と温かさ

「生活を愛する」同じ物でも、山田詠美とは恋愛談など、二人の対照的な違鮮明で、男を語る山田のアラカンぶりがかえって爽や響く。相手次第ではこうはないかも知れない。

相手はその道の第一級りだが、特に公開対談での谷川とは、子供時代を問「あたしは育ちが悪かった」は育ちがよかった」と笑々に核心に入る。純粋培養間知らずな国民的詩人と